ヨーロッパ啓蒙
——共和主義と世界市民主義を中心に——

田　中　秀　夫

「商業においていくらかの進歩を遂げた国家の間で，近隣諸国の進歩を疑いの眼で見て，すべての商業国を競争相手と見なし，近隣諸国の犠牲なしにはいずれの国も繁栄できないと考えるほど，ありふれたことはない。……しかし，諸国民のあいだに，開かれた通商が保たれている場合には，どの国の国内産業も他の諸国民の改善により増進しないはずはない……」[1)]

Ⅰ　はじめに—啓蒙とはなにか

最近，啓蒙の理解が多様化している。様々な啓蒙を認めるポーコック[2)]に反対して，ジョン・ロバートスンが経済学を生みだしたスコットランド啓蒙とナポリ啓蒙こそ啓蒙の典型だとして啓蒙の普遍的定義を唱えたのは，最近のことである[3)]。一方，オランダ，とくにスピノザに啓蒙の起源を求めるイスラエルは，啓蒙を急進的啓蒙と保守的啓蒙の二類型に峻別する[4)]。ポーコック説が穏当で，ロバートスンもイスラエルも極論に見える。しかし，啓蒙に共通の傾向がないというわけではない。啓蒙とは何であったか。

啓蒙は文明化の思想であり近代の精神であった。しかし，啓蒙は文明化一般と同じではない。古代文明は啓蒙とは言わない。古代の知識は特権階級のものに過ぎず，民衆に普及しなかった。中世でも同じである。18世紀にピークをもつ啓蒙は，エリート知識人の思想から始まったが，次第に大衆に伝わり，市民社会の広がりをもった点が，古代，中世と決定的に異なる。啓蒙は普遍的な人間の知性を開放し，知性による自然の支配，人間の自立を目指す運動であり，それは近代ヨーロッパに初めて見いだされる精神の覚醒（アザール）であった。啓蒙を定義するのはなかなか難しいが，その試みから始めよう。

啓蒙は，第一に，知性による世界の解明を意味する。それは，ルネサンスと科学革命，宗教改革という16世紀から17世紀にかけての大変動の結果，18世紀ヨーロッパ社会に広がった世俗化，文明化と社交性の思想であった。ベーコンは「知は力なり」を唱えたが，それは啓蒙思想の萌芽であろう。さらに萌芽はルネサンスの人文主義に遡るべきかもしれない。ヒュームは知性の範囲を経験的認識に限定した。カントも知性に啓蒙の役割を求めた。知性の運動である啓蒙は学問共和国を生みだす。

第二に，啓蒙は都市公共圏の成立と関係がある。啓蒙はルネサンス以来，都市を拠点として展開したヒューマニズム（人文主義）等を経て成立した世俗的な知的活動の総体であり，それを貫く精神である。しかし，勤労としての商業がもたらした富（民富）の蓄積なしには，公共圏も啓蒙の学問共同体も生まれなかったであろ

1）ヒューム『政治論集』田中秀夫訳，京都大学学術出版会，2010年，311ページ。

2）J. G. A. Pocock, *Barbalism and Religion*, Vol. 1, Cambridge U. P., 1999, p. 13. 彼は随所で複数の啓蒙，多様な啓蒙理解を示している。

3）John Robertson, *The Case for Enlightenment, Scotland and Napoli*, Cambridge U. P., 2005.

4）Jonathan Israel, *The Radical Enlightenment*, Oxford U. P., 2001.

う。

したがって，啓蒙は，第三に，商業社会の形成とも関係があった。商業社会の形成は，自由，所有，正義と法の支配に深い関係があったから，啓蒙はこれらの要素とも密接に関係がある。モンテスキューやヒューム，スミスは商業と自由の不可分の関係を説いた[5]。その密接な関係をヒュームほど明快に指摘した思想家はいない。ヒュームによれば，自由とは法の支配であり，法による人権や所有権の保証である。所有権の保証は勤労の意欲をもたらし，自由を拡大し，人間愛を可能にし，知性の活動範囲を広める。所有権と勤労は富者と貧者の階級格差を生み出すが，しかし，社会全体の経済は発展する。こうして啓蒙と自由と商業は関連する。ゾンバルトを批判してウェーバーが看破したように，近代の資本主義は歴史とともに古い詐欺的，掠奪的資本主義とは異なる，勤労による資本主義である。富，都市，公共圏の形成につれて啓蒙は世界に広がっていく。そのような意味では啓蒙はブルジョア（本来は都市民を意味する）社会の産物である。言い換えれば，利己心と欲望の体系としての商業社会が啓蒙を可能にしたのである。

第四に，それ以外の伝統や価値が啓蒙に無関係だったとは言えない。確かに啓蒙は貴族社会の産物でもなければ，キリスト教の成果でもない。しかし，キリスト教の価値（愛と希望）と自然法思想，古典以来のシヴィック・ヒューマニズム（徳・勇気）が啓蒙に無関係であったとは言えないであろう。これらはヨーロッパの共通の遺産であった。

そして第五に，啓蒙は社会や政治の改革と不可分である。ヨーロッパ啓蒙も18世紀末になると，大ブリテン，フランス，イタリア，ドイツのみならず，アメリカやスウェーデン，ポーランド，ロシアなどにも波及し，次々と絶対君主などの専制支配を掘り崩していく。プロイセンのフリードリヒやオーストリア＝ハンガリーのマリア・テレジアなどが啓蒙思想家のパトロンとなり，自身も啓蒙専制君主となったことが，皮肉にも君主政支配を掘り崩すのであるから，当人にしてみれば意図せざる結果であろう。

しかしながら，啓蒙は困難な事業であった。知性の目覚めとして始まった啓蒙がヨーロッパ世界に広まることでさえ容易ではなく，教会権力や国家権力などの様々な旧勢力――それをアンシァン・レジームと呼んでおこう――や民衆の迷妄との戦いを余儀なくされた。しかし，近代の精神，文明化の思想としての啓蒙は，ますます多くの人々の知性の覚醒を導き，市民意識と市民革命を生み出し，国制の変革を招来する。絶対君主政から共和政への転換が進んだ。絶対王政（国王主権）から混合政体（主権分割）へ，さらには二院制議会（国民主権）から一院制議会（人民主権）へと，民主主義革命が展開していった。三権分立もまた啓蒙の成果である。

このようにして市民を主人公とする市民社会が誕生したが，それは国民国家の形成，市民社会と国家の複雑な関係の発生をも意味した。市民社会は経済社会の発展を導いた。経済なるものは長く家計であり，自給を基本とし，せいぜい共同体間の交換にとどまったが，近代になると市場経済が拡大・浸透して大転換（ポランニ）が起こる。生産性の上昇と経済開発の進展は人口の爆発をもたらし，経済的なるものの重要性を高めたのである。こうして国民経済といわれるように，社会全体が経済化し，国家の役割のなかに経済が大きな比重を占めるようになる。国家や政治の問題の大半は経済問題，社会問題ともなる。したがって，啓蒙は経済学を生まざるを得ない。『人間の条件』でアレントは，ここに近代の価値ではなく堕落を見る。人間は卓越を目指すべきなのに，食べることに大半の労

5) Donald Winch, *Adam Smith's Politics*, Cambridge, 1978.（永井義雄・近藤加代子訳『アダム・スミスの政治学』，ミネルヴァ書房，1989年）

力を使うようになったからである。

また市民社会は自治能力をめぐって騒動を生み出し，やがて19世紀以降には，しばしば大衆動員による独裁政治を招来することにもなって，啓蒙の理念としての自由と平等の理念は，苦難の歴史を辿る。一院制は独裁を生み出し，民衆の代表を名乗るデマゴーグに操られて，全体主義となって破綻した。『啓蒙の弁証法』で，ホルクハイマーとアドルノが告発したのはこの局面である。

本稿は啓蒙の様々な論争が展開された啓蒙の知的運動としての「学問共和国」に関心をもつもので，とくに啓蒙の共和主義と世界市民主義に光を当てることを試みる。人間観や国制の問題，自由主義やナショナリズムとの関連にも言及し，それぞれの伝統の特徴をいくぶんなりとも明確にしたい。以上が本稿の狙い（Scope）である。

1　合理化，循環，疎外

前述のように啓蒙の始原はルネサンスのイタリアにある。しかし，ルネサンスにも先行する起源があった。ウェーバーを参照して言えば，啓蒙は合理化の歴史の一齣である。広い射程で歴史を振り返れば，文明史は野蛮から文明への合理化の歴史であり，進歩の歴史である。古代ギリシアとローマの自由民＝市民を主体とする古代文明は，ある種の狭隘な啓蒙であったと言えなくはない。もちろん，揺り戻しもあれば，文明の衰退の繰り返しもあったから，合理化も進歩も発展も一直線に進んだわけではない。啓蒙思想家も歴史を興隆と衰退を繰り返すポリュビオス的な「循環」として理解した。ヨーロッパでは文明史は二循環目を迎えているというのが，スミスなど啓蒙思想家の認識であった。

世界が魔術の園からの合理化――それは何より知性の変化であり，空想から科学への進歩であった――を推し進めるのは，ほぼ不可逆的な過程であって，それは世界史の趨勢である。合理化の極点に不合理な化石化した現代文明を見たのが20世紀初頭のウェーバーであるが，啓蒙の時代には，そのような化石化は未来の可能性に過ぎなかった。けれども，ルソー，スミス，ファーガスン，ミラーは商業文明に分業労働に基づく人間疎外を見いだした――文明の相反性認識――から，マルクスやウェーバーの認識の先取りをしていた。

合理化が不合理を帰結するというのは，とくに20世紀以降に顕著になった現象である。けれども，今なお合理化は進んでいる。不合理化を伴う合理化の貫徹という通時的構造のなかに，啓蒙はある。とくに18世紀のヨーロッパという世界史の一齣に独自の位置を占める文明のあり方として，啓蒙を位置づけうるであろうが，しかし，啓蒙の精神は合理化の精神，世界の理知的な理解の営みとしては，18世紀ヨーロッパに留まらず，世界史の精神として世界中で噴出する可能性があった。ヘーゲルはそのような側面に注目をした。

啓蒙は近代的個人，近代的市民の思想であり，知性と情念の解放の思想であった。啓蒙の知性主義は様々な形の進歩の思想を生み出した。啓蒙はルネサンスと科学革命の精神を継承し，宗教改革の狂信と熱狂を拒否したが，それは容易なことではなかった。それでは啓蒙の近代的個人はどのような種類の人間類型として考えるべきであろうか。

Ⅱ　啓蒙の人間像―利己心と仁愛

近代的個人の思想である啓蒙にとって，自律と人権と個人主義は不可分の関係に立つ。近代的個人は宗教改革と戦乱による伝統社会の紐帯の解体を経ずには成立しなかった。孤独な存在が近代の個人である。ルターの万人祭司主義，聖書中心主義，神の器としての人間像からカルヴァンの神の道具としての人間像，地上における神の国の樹立へと思想を進めた急進的な宗教

改革は，乱世にあって救済を願い，自らの内面を直視する個人と個人主義を生み出した。近代的な個人は伝統的な価値を拒否し，良心（Conscience共知）と召命（Calling, Beruf）を価値として受け入れた。プロテスタントの個人主義は公共的な価値ではなかった。それは伝統的な共同体を解体する爆弾であった。キリスト教の伝統にあっては，価値は公共精神Civic virtueではなく「神への義務」であり救済であった。同胞愛も価値であったが，同胞愛の実践は，慈善であり，相互扶助であり，寄付行為であった。神の善なる意志（Benevolence）が同胞への慈善＝仁愛（Benevolence）を導いた。キリスト教の同胞愛は，ギリシア，ローマ的な政治的な公共性の思想とは異なる。カルヴィニズムが生み出したのは，世俗的禁欲を実践する，原罪を負った自己を断罪する「聖なる敬虔な個人」であった。贖罪の思想はプロテスタントによっても継承された。しかし，こうしたプロテスタントの個人主義は，世俗化の影響を受けて，世俗的な個人主義が生まれることを阻止できなかった。ホッブズの計算する感性的な人間像はその典型である。

こうして啓蒙は人間本性のなかに強い利己心，欲望を見いだし，それを肯定する理由を探し出す。利己心を利他心＝仁愛と同等に有徳と見なすことは容易ではなかった。しかし，利己心は自己啓発＝自己啓蒙を経て，より高い能力，職務への専心を可能にする個人を形成するであろう。このことにやがて啓蒙は着目した。こうして「勤労」Industryと「能力」Power, Faculty,「利害」Interestを鍵概念とするブルジョア的（商業的市民の）徳Virtueの思想が生まれた。社交性，社会性が一つの具体的な形態としての商業，商品交換となって国内的にも，国際的にも，広がった。こうした商業社会の徳の思想は近代になって初めて生み出されたものである。世俗的勤労的個人主義はカルヴィニズムの世俗的形態であり，近代的なエピクロス主義である。エピクロス主義はマンデヴィル段階で社会化される。それは奢侈や欲望を通じて社会的需要を生み，社会的活動，経済的繁栄を実現することによって建設的な役割を果たす。そのような新しい認識はマンデヴィルやフランスのジャンセニストによってもたらされた。

したがって，利己心の結果的な正当化を行なうことは最早，不可能ではなかった。シャーフツベリ＝アディスン段階となると，さらに感情の洗練が付け加わる。こうして利己心と仁愛は，人間本性の二つの原理として共存し，良い結果をもたらすと考えられた。「人間本性の考案者は賢明にも人間本性に行為の二つの原理，自愛心と仁愛を備え付けたのである」とグローヴは述べた（*Spectator*, no. 588, 1714, Henry Grove）。仁愛，人間愛，共感，同感などの用語によって，人間の感情分析がますます精緻に行なわれる。こうして18世紀は「感情の人」を生みだすが，それは前例のないものであった[6]。

社会は人間の関係であり，組織である。強者と弱者の関係は支配・被支配となりがちである。それは契約という形式を持っていても，脅迫原理と裏腹の縦の原理である。平等な社会への憧れは古い歴史がある。平等な社会とは相互性の原理に立脚する社会である。そこでは横の関係としての正義の概念が生まれる。それ以外にすべてを包み込む神の慈愛のような原理を啓蒙思想家は考えた。ベネヴォレンスBenevolenceがそれである。

啓蒙の時代にはBenevolenceは国境を越えるか否かが論争された。家族愛，祖国愛と人類愛は両立するであろうか，どれが優位するのか，またすべきなのか，といったことが論争された[7]。

6）Norman S. Fiering, “Irresistible Compassion: An Aspect of Eighteenth-Century Sympathy and Humanitarianism”, *Journal of the History of Ideas*, 37–2, 1976, p. 212.

7）Radcliffe, “Revolutionary Writing, Moral

現代から振り返ると，BeneficenceやBenevolenceは横の関係ではないように思われる。富者と貧者からなる格差社会の原理である。格差社会では正義は配分的正義によって補完されなければならない。にもかかわらず，シャーフツベリやハチスンはすべての人間＝人間本性に内在するものとしてのBenevolenceを横に広がる原理として考えた。人間本性は階級も国も越える。ラドクリフによれば（p. 222），普遍愛の最も一貫した擁護者は，シャーフツベリ，ハチスンとジョナサン・エドワーズであった。彼らは規範と現実を混同したように見える。しかしシャーフツベリ，ハチスン，エドワーズには大きな差異があるように思われる。信仰に置く比重は，ホイットフィールドとともにアメリカ植民地における信仰回復運動のリーダーであったエドワーズが圧倒的であり，シャーフツベリが最も少ない。ハチスンは中間である。同じBenevolenceを語っていても，貴族哲学者シャーフツベリと改革者ハチスンではその意味は相当に異なる。しかし，ハチスンがシャーフツベリの洗練の哲学の影響下にあったことは否定しがたい。18世紀の啓蒙＝文明化の文脈では，二人は利己心の哲学者マンデヴィルに対抗して，感情の温和化に啓蒙の目標を置く穏健派啓蒙の旗手であった。

ハチスンたちの普遍的仁愛を正面から批判したのはヒュームである。バトラーとケイムズは普遍愛＝人類愛を弱い原理と理解した。「人間精神には人類愛そのもののような情念は存在しない。」（*Treatise of Human Nature*, Oxford, 1978, p. 481）ヒュームはそれに代わって商業＝交換の正義が国内的にも，国際的にも友好関係を形成すると説いた。スミスも仁愛の普遍性を否定した。「我々の有効で優れた職務は，我々自身の国以上のいかなる広い社会にも拡張されることはきわめて稀である。」（*Theory of Moral Sentiment*, OUP, 1976, p. 235）ヒュームもスミスも商業によって結果として普遍的仁愛の目的が実現されるとしたのである。

リチャード・プライスやデイヴィッド・ハートリはハチスンに近い見解であった[8]。

キャロライン・ロビンズは，17世紀末から18世紀初頭にかけての敬虔な信仰の精神を研究者は軽視してきたと指摘している[9]が，にもかかわらず世俗化は強力な流れであった。啓蒙はこの世俗的な個人主義を世俗的な文明社会（エピクロス主義）へと解き放ち，社交的にしようとした。宗教改革は原罪の思想（アウグスティヌス主義）に目を向けたが，啓蒙は原罪の教理に重きを置かなかった。厳密に言うと，啓蒙はプロテスタンティズムの影響を受けたが，それから生まれた思想ではない。啓蒙はそれ自体が，科学と知性の思想であり，社交性の思想であった。啓蒙はアリストテレスの公共的存在としての人間（Zoon Politikon）の概念を変形しつつ継承した。科学・技術は宗教とは違って，ルネサンスのヒューマニズム（人文主義）としてヨーロッパ中に広まった。ヒューマニズムは学問の思想であり，それ自体が学問であるから，どこにでも移植可能である。

啓蒙は，人間理性への信頼と定義しようと，人間的感情（情念）の発見として把握しようと，文明社会の擁護として掴もうと，いずれにせよ暴力的支配ではなく，社会的な交流を通じて社会を変革し，また交流を通じて異文化社会が相互理解を推し進め，平和で豊かな共存を目指すという「社交性」Sociabilityあるいは「社会性」Sociabilityの思想であったことが決定的に重要である。

したがって，啓蒙を，人類愛，人間知性への

Philosophy, and Universal Benevolence in the Eighteenth Century", *JHI*, 54–2, 1993, pp. 222–8.

8）Radcliffe, p. 224.

9）Caroline Robbins, "Faith and Freedom (c. 1677–1729)", *Journal of the History of Ideas*, 36–1, 1975, p. 47.

信頼，社交性の思想，文明社会の擁護，学問・技芸の推進，宗教的寛容，平和主義等の諸要素の総合と見なしてよいだろう。その個々の要素は歴史的に散発的に方々で，いろんな時代に見いだしうる。人間愛は古代ギリシアにもあったと思われるし，平和主義はわが平安文化の特徴でもあった。しかしながら，啓蒙が18世紀のヨーロッパにおいて見られたような諸要素の総合として登場したことはそれまでになく，したがって啓蒙は歴史的に新しい現象であった。それを市民社会の思想と名づけてもよいし，世界市民の思想と言ってもよいかもしれない。啓蒙は歴史的概念としてヨーロッパに対しては18世紀に当てはめることが，一般的な了解になっている。その理由はすでに了解されたであろう。

Ⅲ　自然法と共和主義

ホッブズ，デカルト，スピノザ，ロック，プーフェンドルフなどを想起すれば直ちに了解しうるように，17世紀にはすでに啓蒙の要素は相当多く生まれていた。しかしこの世紀には，いまだ宗教戦争が荒れ狂っていた。ペスト禍による大量死をも経験した17世紀は，危機の世紀と言われるけれども，この時代はまさに狂信と熱狂の時代なのであった。この時代のホッブズからプーフェンドルフ，さらにニュートン，ベールなどの著作が啓蒙の基礎となったことは疑いの余地がないけれども，彼らはいまだ「前啓蒙」に属すとするのが，これまでの通説である。しかし，彼らを「初期啓蒙」の思想家と理解したほうがよいのではないか。

他方，功利主義に牽引された19世紀は産業革命を生み出したにもかかわらず，人間の知性の力に期待する啓蒙のオプティミズムが失われ，ナショナリズムと戦争の時代となったから，啓蒙の要素は継承されたとしても，もはや啓蒙の時代というより，ナショナリズムの時代であった。もちろん，ナショナリズムは19世紀に突如生まれたものではない。その起源は近代初期に遡る。けれども，18世紀にはいまだ19世紀ほど排外主義的な国民の思想にはならなかった。啓蒙の世界市民主義的要素が勝っていた。19世紀も後半になると，ますます帝国主義的な覇権を争うようになった。

1　公共性の概念―公共圏の形成と公法

公共的な事物としての国家概念の形成が封建社会と近代社会を分かつ分水嶺である。それは国民国家概念の形成でもある。ゲルマン封建中世にとって公法概念を作り出すことがいかに困難であったかについては，マックス・ウェーバーの指摘にある通りであった。家共同体が解体し，擬制としての家国家観が崩壊して，公共圏が形成されるのと並行して公法概念が成立した。国民の概念が形成され，同意による政治が国家にあまねく浸透することが必要であった。

そのプロセスの中間には絶対君主による代表的具現が成立していた[10]。絶対主義的なエリザベス1世，ジェイムズ1世，ルイ14世などの国家はそうした絶対主義時代の過渡的な国家を表現するものであった。国家はまだ国王であった。しかし，市民社会が発展するにつれ，異なる次元から公共性の概念が生まれてくる。KingdomからCommonwealthへの転換にその事情は反映している。それはローマ法の再発見によっても，またマキァヴェッリによる古代の共和主義の復活によっても，推進された。

近代になると公法と家族法と民法の三分割から，家族法が消滅し，民法に組み入れられる。それは召使が解放され近代的な賃金労働者に転化するとともに，家族が公共的役割を失い，ますます親密圏となったことを意味する。それは個人の成立につながっている。こうした法の二

10）ピーター・バーク，石井三記訳『ルイ14世』名古屋大学出版会，2004年を参照。

元論は，私人と市民の分裂を引き起こす。個人は，私人としては家族に属し，市民としては国家に属すことになる。ルソーが喝破したように，このような分割をもたらす根底には，社会の変化，経済の発展があった。

召使や家族労働者が主人のもとに隷従していた時代から，徒弟制を経て，近代的な労働者になっていくという長期的な変化が存在した。新しい産業が成立してくる。このようにして経済社会が形成されてくると，政治社会にも影響を与えざるを得ない。

とくに市民階級，ブルジョアは，封建的な階級ではなく，自由人として政治概念の転換を先導する。そして彼らはマキァヴェッリやグィッチャルディーニが復活したギリシア・ローマの公共性の政治思想，すなわち共和主義を摂取する。復活した共和主義は，出版文化をはじめとする啓蒙の文化装置の普及とともにアルプスを越えて各地に広まっていく。すなわち，イタリアで復活された共和主義的な市民社会思想が，オランダをはじめとして，イングランドにも，フランスにも波及し浸透していく。その間に，共和主義が多様なものとなっていくのは当然であろう。

啓蒙は自由と平等を目指した。個人の自立，市民相互の平等，政治的権利の平等な配分，共和主義的な政治社会などを追求した。所与の社会は縦の階級差別が貫かれた社会である。しかし，18世紀のヨーロッパでは次第に社会が商業社会へと変化しつつあった。そこに市場の取引のような横の平等な正義，公正としての正義が浸透してくる。地域によって商業社会化の程度と進行速度は違っていたが，啓蒙の拠点となったのは，このような商業社会化が進んできた都市であった。

都市は商業の拠点となることによって，富を蓄積する。富は啓蒙の文化装置を生み出す。宮廷のサロンは貴族が主催者であるが，そこでの役者は作家であり，音楽家であり，詩人であり，哲学者となる。アカデミーができ，議会，裁判所，大学，図書館，劇場，博物館，美術館，公園，広場，市場，プロムナード，公道，橋，カフェ，居酒屋などに人びとが集まり，保養地も栄えるようになる。サロンやクラブのような親密空間も生まれる。様々な書物が求められ，出版業が発達し，新聞や雑誌の発行も盛んになる。商店街，目抜き通りも出来てくる。様々な演技，見世物，大道芸なども登場する。こうした装置が，市民的文化の基盤となる。公共圏の誕生である。都市は住宅地でもあれば，社交空間でもある。王侯貴族がいても構わない。むしろ，彼らは奢侈的な文化，洗練の見本であり，パトロンでもあり，市民の欲望を刺激する文化の源泉でもあった。

封建社会との決定的な違いは，封建社会にはこうした公共圏はなく，宮廷や財宝は，封建社会では掠奪対象であったのに対し，いまや，宮廷や財宝を掠奪しようという粗野な権力者は姿を消し，自らの財力で，奢侈品は購入するものとなったことである。古い支配階級は，これによって散財し，没落した。こうして封建的暴政は終焉を迎える。これはスミスが強調した，幸運な見えざる手の働きの一つであった。交換の正義が横の関係を組織した。掠奪の対象を失った貴族は，奢侈的生活にスポーツを加え，戦闘から狩猟へと活動を転換する。勤労は卑しい身分の役目であり，労苦であった。「顕示的消費」の概念によってヴェブレンが上流階級の奢侈的生活を描き出したように，商業，生産と勤労は高貴ではなかった。そのような価値観は，近代にまで持ち越された。いかにして勤労を徳＝価値として評価するか，それが啓蒙の経済哲学者の課題でもあった。もとより，こうした変化がヨーロッパの18世紀に全般的に見られたとしても，地域差もまた大きかったし，思想も地域によって多様であったことも否定できない。

2　共和主義

こうしたヨーロッパの啓蒙思想の一つの重要な要素であった共和主義思想と，その両サイドに位置する世界市民主義，およびナショナリズムとの関係を明らかにすることが必要である。同時に，自由主義や民主主義の概念との関係も明確化しなければならない。

その前提には，共通の遺産としてのヘレニズムとヘブライズム，ギリシア・ローマの遺産とキリスト教の伝統があり，自然法思想があったことは言うまでもない。こうした遺産と，新しい思想がどのような相克を展開したかという問題もあるが，それはここでは扱えない大問題である。

自然法と同じく，共和主義もヨーロッパの共通の伝統であった。その事実は，最近のスキナー，ゲルデレンの編著が強調した通りである。とくにマキァヴェッリが統治論と関連して共和主義を押し出して以来，賛否両論を引き起こしつつ，君主政と共和主義は政治論争の主題であり続けた。もちろん，古来のプラトンの国家論と哲人為政者論，アリストテレスの政治学，徳論と政体論がルネサンス以来，復活され次第に改めてヨーロッパの共通の遺産になるというプロセスがあった。プラトンの理想国家論は，モアやカンパネラの最善政体論において姿態転換を遂げて復活したし，それ以外にも多数の理想国家論が書かれた。スコットランドでもウォレス，ヒューム，リードなどが理想の国制を描いた。

多くの思想家，とりわけ共和主義者は理想の政治制度の仕組みとともに為政者の資質・徳を問題にしたが，マキァヴェッリとともに，為政者のヴィルトゥが失われやすいものであることに注意を喚起していた。有徳の顧問官モアは国王ヘンリ８世の徳の欠如の犠牲になった。顧問官の徳も腐敗しがちであった。国家制度も腐敗すれば，人間も腐敗を免れないという認識が共通であった。常に原理への復帰が問題となった。腐敗した国家は原理に復帰することによって蘇えらねばならないとされた。人間と国家の歴史は腐敗と原理への復帰の繰り返しであった。原理への復帰が革命であった。こうして政治と国家の歴史は循環を繰り返すものであった。

ギリシア・ローマの伝統においては，共通の事物，すなわち公共の仕組みと理念についての思索が政治学であった。人間はゾーン・ポリティコンであったから，個人は公共的存在でもあった。現実の国制と理想の国制についての思索としての政治学は共和主義の政治学であった。ゲルマン中世はまったく異なる世界像から出発した。ゲルマンは部族法典を持っていたものの，ローマ人の私法も公共性の思想も外部のものであった。ゲルマンにあってはローマ人の公共性は解体していた。ローマの共和主義思想はゲルマンに継承されなかった。

中世封建社会では，私的権力の闘争を軸にした社会形成が主流になった。領土支配，農地Feudumが所有の基礎であることに変化はなかったが，封建的主従関係が新しい秩序原理として登場した。それは疑似個人主義的な原理であったが，縦の関係の原理であった。横の関係は無秩序であり，自然状態であった。封建的主従関係は統治契約説でもあったが，それは同輩中の第一人者としての君主権の正当性論をもたらした。君主権に続いて世襲権力が登場した。封建的領域国家の世々の国王こそ，フィルマーの『家父長制』の基盤である。古代の共和主義と中世の封建的君主政は対抗関係にあったが，前者は後者に影響を与え，やがて共和主義的君主像が成立する。ゲルマンの暴君は，やがてキリスト教を信奉し，ローマ共和国の思想を取り入れ，神聖ローマ皇帝を名乗るようになる。

共和主義的君主を実際に見いだすことは容易ではなかった。知と徳を備えることは教育と経験に加えて，生まれながらの素質も関係したからである。どこにでも見いだしえた暴君，専制君主，ミニ暴君としての貴族に対して，中・下

層階級はゲルマンの部族法典に起源をもつ抵抗権論，暴君放伐論に依拠して抵抗した。暴君放伐論は，サン・バルテルミーの虐殺（1572）を経て，ユグノーによって明確に定式化され，共和主義の武器ともなる。ユニウス・ブルートゥス『暴君放伐論』やオットマンの『フランコ・ガリア』（1574）は，アイルランドのモールズワースの『デンマーク事情』(1692)を生みだす。

自然法学者は30年戦争をはさむ時期にまさに内乱，戦乱を克服する手法として自然法思想を展開した。グロティウス，ホッブズ，プーフェンドルフ，ロックたちである。彼らは権力闘争の現実を権力だけで克服することはできないと考えた。彼らが援用したのは神の命令としての自然法の順守義務であり，社会契約による国家の形成という同意理論である。同意は義務を生む。契約は順守されねばならない。こうして外面ではなく内面を義務づける自然法思想が主流の思想となった。社会契約説は18世紀にも継承され，ルソーやカントが援用するであろう。同意による政治という概念は，人民の主体的な意志行為であるがゆえに，人民を縛る拘束力があった。自然法に導かれて行為する人間の義務の順守に社会形成の原理を求めたのである。社会契約によって平和を実現するという自然法学者の思想は，しかしながら，いくぶん空想的であった。グロティウスもプーフェンドルフも自然法＝神の法によって平和をもたらそうとしたが，それだけでは平和を実現することはできなかった。

ウェストファリア体制は勢力均衡によってかろうじて平和を実現した。勢力均衡も取り決めであり，ある種の契約ではあった。しかし，取り決めである限り，それはしばしば侵犯されたのであって，実際には戦争は繰り返された。さらにまた新しい現実として，植民地争奪をめぐって，ますます激しく国家理性が対立した。

現実主義者は共和主義の原理に即して考える傾向があった。その原理とは徳と均衡である。共和主義者フレッチャーはブリテンとヨーロッパの平和をバランスの思想によって構築しようとした。商業は新しい力であり，もはや無視できなかった。大陸の戦争に加わり各地を遍歴したフレッチャーは，戦争の一方で，商業文明が発展していることを強く認識した。商業が戦争を激化させている面もある。商業と政治，軍事の力をいかに制御しうるかは，フレッチャーのような共和主義者にとって，自明ではなかった。ホッブズは絶対主権の統括によって諸力を法的，制度的に序列化することで秩序を与えようとした。フレッチャーにとっては，内面だけを義務づける自然法は万能ではなかった。国家主権の法もまた国際秩序を規制する力はなかった。フレッチャーが注目したのは，ヨーロッパの再分割と攻守同盟の形成という，連合と均衡であった。しかし，この提案は自然法思想に劣らず，空想的であった。少なくとも当分の間は空想であるほかなかった。しかし，戦争の限定という目標に向かって自然法思想家も共和主義者も共同戦線を張っていたのである。

戦争は古来の営みであった。戦争原因はさまざまであったが，最大の原因は掠奪文化に求められる。文明は長く強者の支配であった。強者は良きものを独占しようとした。力による掠奪を否定する思想も古くから存在し，近代に伝えられた。ギリシアの古典哲学の徳の思想，ローマ法，キリスト教の愛などがそれである。古代ローマ文明は野蛮を支配しようとして，帝国支配に辿りつき，やがて腐敗して野蛮となった。ゲルマン人は戦争によってローマの支配を滅ぼした。ゲルマン諸部族はローマを崩壊させてから権力争いを繰り返した。戦争と平和は交代を繰り返した。この循環をどうすれば断ち切れるのか。啓蒙思想家もまたこの問題に直面していた。しかし，18世紀は一面では長い繁栄を続けていた。戦争や動乱はあるものの，ヨーロッパの近代社会は200年以上にわたって繁栄してきたというのが，アダム・スミスの認識である。

戦争の限定に成功したのは火器の発明によるとスミスは述べている。

平和の産業が戦争に取って代るにはどうすればよいか。それは共和主義者の問題でもあったが，彼らは徳とバランス，混合政体，勢力均衡のなどの概念によってこれにこたえようとした。しかし，それは戦争と腐敗の一時的な抑止・制御の理論にはなりえても，廃絶の理論にはなりえなかった。戦争と内乱，テロリズムの廃絶は今なお実現しない困難な課題である。

ボリングブルックはカトリックのヨーク公ジェイムズのために『愛国王』(1740)を書いて，良き君主の条件を明らかにした。それは共和主義的な国王像であった。最近の研究が強調しているように[11]，君主政は必ずしも共和主義と対立しないと考えられていたのである。もとより，共和主義は専制とは対立した。しかし，温和な君主政とは対立しなかった。問題の焦点は公共精神，祖国愛，愛国心にあった。家族愛と祖国愛は調和するのか。祖国愛は人類愛とどう関係するのか。私利と公益はどうすれば一致するのか。問題は自明ではなかった。自然権思想が登場した17世紀から18世紀には，まぎれもなく個人主義が登場し，私利の概念が登場する。家族もまた重要になってきた。私的所有の概念が鍛えられねばならなかったのは，そのような時代の要請であった。一方の自然権，私利，家族，所有と，他方の国家，公権力，公共精神，祖国愛とが対峙する一方で，人類共同体，人類愛，仁愛との関係も問題になったのである。こうした問題は自明ではなかった。したがって，解答は多様であった。

シャーフツベリが自愛心，家族愛，祖国愛，普遍的仁愛が矛盾せず調和すると考えられたのはなぜか。神の被造物としての人間はすべて同胞である。同胞としての人間は，家族をもち，国家に属し，そして普遍世界にも地位をもっている。ハチスンもまたシャーフツベリに同調した。彼らはこの世に争いや騒乱があることを知らなかったわけではない。にもかかわらず，彼らがこのような調和の思想をもちえたのはなぜか。それは，人間本性のなかに，道徳，善，慈悲，洗練，品位，平和，幸福を求める性質を見いだし，そうした社会的感情，社会性の可能性に着目したからである。社会性あるいは社交性は18世紀にきわめて重要な概念となる。

フレッチャーが舞台から退場した盛期啓蒙の時代に，ヨーロッパの各国は，前世紀ほどではないにせよ，頻繁に戦争をした。ウェストファリア条約によってようやく平和が回復したかに見えていたが，しかし，実際には，勢力均衡の背後で国家理性が国威発揚を戦略的に求めたのであった。したがって，歴史とともに古い王位継承戦争も頻発したが，スペイン継承戦争やオーストリア継承戦争は勢力均衡を賭した国際戦争ともなったのである。国家理性と国家主権は，多くの国民を国益（national interest）の網の目に組み込み，家産制国家を近代的な国民国家へ転換するイデオロギーの役割を果たした。国家組織は国益の制度化であったから，イデオロギーや教育を通じて，アモルフな大衆を国民（nation, people）へと鍛造することが必要であった[12]。ヨーロッパ内部での領土争いもしばしば起ったが，アメリカとアジアにおける権益をめぐって，ブリテンとフランスの植民地争奪がいよいよ熾烈になった。

ウィッグ・キャノンの受容を介して，アングロ・サクスンの国制と名誉革命を理想化していたアメリカの革命家たちが，母国と戦ったのは母国の腐敗した議会を本来の原理に復帰させ再生させるためであった[13]。1776年に独立宣言

11）Hans Brom ed., *Monarchism in the Age of Enlightenment*, Toronto, 2007.

12）Linda, Colley, *The Forging of the Nation*, 1992.

13）Trevor Colbourn, *The Lamp of Experience*, 1965. Bernard Bailyn, *The Ideological Origins of the American Revolution*, pp. 80–81. Gordon Wood,

を行なったアメリカは，母国との8年間にもわたる独立戦争に勝利し，1784年に独立を承認された。大陸会議の次のイシューは連邦共和国の形成であった。国家統合派と各邦自治派に分かれてたたかわれた論争は容易に収束せず，憲法制定会議は延々と議論を展開した。フランクリンのペンシルヴァニアは一院制議会であった。急進的な民主主義者は一院制論に立脚する傾向があった。大陸会議に派遣されたペンシルヴァニアの代議員は共和国も一院制にすべきであると主張し，アダムズなどの混合政体論と対立した。

フランクリンはフランスに滞在して一院制論を流布した。テュルゴやデュポン，コンドルセなどがそれを受容する。フランクリンの一院制議会論は，ルソーの一般意思の理論と融合して，フランス革命の思想を生み出し，こうして，やがてフランス革命は一院制の国民議会，国民公会，ジャコバン独裁を帰結する。欺瞞的な国民主権ではなく人民主権こそが真の民主主義であると主張されたのである。しかし，一院制議会は民衆の独裁を帰結しかねず，危険であることが，アダムズなどによって主張されていた。アダムズもまたフランスに滞在して均衡国制の意義を説いたのであった。したがって，ジャコバン独裁は意図を超えた政治力学の産物であったとばかりは言えない。

Ⅳ　啓蒙思想家の旅と世界市民主義

思想はとりわけ書物を通じて伝わったが，知識人同士の交流，印刷業者＝出版者と著者の直接の交流もまた重要である。ガリレオが象徴するような経験的知識の発達と，グーテンベルクに代表される活版印刷術の発明による知的革命が，精神的権威，知的独占者としてのカトリック教会の権威を掘り崩した。ホッブズとペティーはオランダでヴェサリウスの解剖学を学んだ。

国境を越えた学問共同体の伝統が，世界市民主義を生み出し，逆に世界市民主義が国際的な学問共同体を牽引した。学問共同体も世界市民主義も，共和国思想の産物である。世界市民主義は，啓蒙思想家の旅によって広まり，各地の学問の拠点，都市，大学，サロン，宮廷などでの直接の交流によっていっそう深められる。それでは，思想家の旅を少し振り返ってみよう。

18世紀の貴族がグランド・ツアを好んだように，知識人もまたしばしば長い旅をした。国境はあまり妨げにならなかったように見える。様々な伝統がそのような旅を可能にした。世界市民主義の伝統も旅を支えたであろうし，また啓蒙知識人の旅は，世界市民主義をさらに形成することに寄与した。旅券はどうだったのだろうか。貴族の子息の個人教師としてグランド・ツアに随行する場合もあれば，政府の外交使節の一員となって行く場合も従軍牧師，従軍医師などとして旅をする場合も，また亡命者，移民となって旅をする場合もあった。自発的な旅もあれば，強制的な旅もあった。流刑者の旅もあれば，逃亡の旅もあった。

ジョン・ローは決闘で人を殺めてフランスへ逃亡し，フランスでローのシステムを考案して経済をいっそう撹乱した。ジェイムズ・ステュアート卿はジャコバイトの反乱に加担し，エミグレとしてヨーロッパを放浪したが，その見聞が『経済の原理』(1767) の執筆に繋がった。ヒュームが若い日々をフランスのラ・フレーシュの僧院で過ごし，思想の新情景に目覚めたのは，あまりにも有名な話である。ヒュームは，その後もヨーロッパを広く見聞して，文明社会の多様性にまつわる社会認識を深めた。

アダム・スミスはグラスゴウ大学の教授職をなげうって青年バックルー公爵に随行してフランスに赴いた。アダム・ファーガスンはエディ

The Creation of the American Republic, 1776–1787, 1969, p. 10.

ンバラ大学の道徳哲学教授職に在職のまま，チェスタフィールド卿の子息の家庭教師として大陸に旅をした。このように一流の知識人がしばしば青年貴族のグランド・ツアに同行した重要な理由は，旅の楽しみもあるが，旅先で啓蒙思想家と交流できることにあった。スミスは，穏健派の雑誌『エディンバラ評論』第2号(1756)に寄稿したヨーロッパ学界展望で知られるように，早くからフランスの思想界に注目していたが，フランコ・マニアとしてフランスへと渡ったのは1764年のことである。

大ブリテンでは保養地リスボンへの旅も人気があった。1755年に起ったリスボンの地震は高層ビル群の壊滅と6万人もの犠牲者をうみ，この被害によってポルトガルの覇権に終止符を打った。リスボン地震は啓蒙思想家の間に，その意味をめぐって論争を引き起こした。リスボンに続いて大西洋を隔てたアメリカでも地震が発生し，アメリカでも地震の原因をめぐって論争が起こった。

バースの温泉も知識人を惹き付けた。ヴォルテールやモンテスキューはロンドンを目指した。花の都への憧れを隠しきれずに，ルソーは植物採集や作曲を楽しみながら，ジュネーヴからパリへ放浪の旅をし，『社会契約論』(1762)を出版してからは，当局の弾圧をかいくぐってパリからイングランドへと逃亡に近い旅をした。ブリテンの貴族はフランスとイタリアへと旅をしたが，ゲーテはイタリアを目指した。

ヒュームは，コンウェイ将軍のフォントノアの戦闘に秘書として随行し，そのままフランスにとどまったが，社交だけが目的ではなく，外交の任務を帯びていた。エディンバラ大学の道徳哲学教授であったプリングルは卓越した医師でもあって，従軍医師としてフランスに行った。ファーガスンはカーライル使節団の随員としてアメリカへ長い旅をした。

旅は楽ではなかった。道路も悪く，馬車のスプリングも改良されたとはいえ，疲労は大きかった。宿場も未整備で，貴族は貴族の館を当てにすることも多かった。海路も当時の船では安全とは言いがたかった。帆船時代だから風次第でもあった。街道には強盗，公海には私掠船が出没したから，武器は必需品であった。それでも旅が与える楽しみもあれば，目的地での期待や抱負あるいは使命が勝った。

知識人の旅の行き先は様々である。スコットランド人が大陸，パリやイタリアの都市を好んだとすれば，フランスのフィロゾーフはヨーロッパ各地の宮廷に招かれたり，イングランドを訪問したりした。ゲーテはイタリアを旅して『イタリア紀行』を残した（刊行は1817)。ヴォルテールの『哲学書簡』(1733）はイングランド旅行の副産物である。同じくアングロ・マニアであったモンテスキューも，グランド・ツアの最終目的地にイングランドを選び，ウェストミンスター議会を傍聴した。彼がイングランドの権力分立を学んだのは，ジャコバイトのボリングブルックからであった。ボリングブルックは案外読まれており，アメリカではジョン・アダムズもジェファスンも半世紀の後にボリングブルックを愛読するであろう。

イングランドの議会（パーラメント）とフランスの高等法院（パルルマン）は，似て非なるものであった。キャロライン・ロビンズが明らかにしたように，イングランドの議会政治は，君主の独裁政治に甘んじた大陸の知的エリートにとっては，羨望の的であった[14)]。前世紀まではイタリア，オランダ，フランスの後塵を拝していたイングランドが，今では世界の先端の民主政，制限政体，均衡国制を実現し，宗教的寛容もほぼ実現し，社会は繁栄していたから，その秘密を知りたかったのである。

イングランド人はというと，にわかに先進国民になったものの，所詮は田舎紳士であったか

14) Caroline Robbins, *Absolute Liberty*, Archon Books, 1982, pp. 121–130.

ら，奢侈と美の国，文化財の宝庫でもあれば流行の先端も行くフランスやイタリアへの憧れは止みがたかった。彼らは大陸にも渡ったけれども，スコットランドの崇高美を求めてハイランドや島嶼の旅も楽しんだ。サミュエル・ジョンスンやテナントの旅は有名で，自然美に惹き付けられ，「崇高」が注目される概念となる。ロンギヌスの『崇高について』が再版され，バークも『美と崇高』(1758) を書いた。ルソーは植物採取を楽しみながら放浪の旅をした。フィールディングやクレイギーたちは，病を癒すために，保養地リスボンを目指した。

後に歴史家となるギボンは，オクスフォードの学生時代に読書を通じて密かにカトリックに改宗したことを父にしかられ，ローザンヌのプロテスタント牧師のもとに強制的に旅をさせられた。ギボンに影響を与えたのは国教会牧師で自由思想家のコナーズ・ミドルトン (Conyers Middleton, 1683–1750)『自由な究明』(1749) であった。ローザンヌでの，ピエール・ベール，フォントネル，ジャンノーネなどの読書を通じて，ギボンはカトリック教会を軽蔑するに至り，キリスト教に懐疑的となった。その後，大陸の方々を旅したギボンは，1764年10月15日，ローマのカピトール (カピトリヌス) の丘で夕日に照らされながら大著『ローマ帝国衰亡史』の執筆を思いついた。ギボンの大著は大ブリテンではよく読まれたが，アメリカではさほど反響を呼ばなかった。

1　ボズウェルの旅

フランクリンと親しかったサミュエル・ジョンスンが，スコットランド人のボズウェルと一緒にハイランド地方，「ヘブリディーズ諸島」への旅をしたことはあまりにも有名である。『スコットランド西方諸島の旅』(1774) はその副産物であった。名門に生まれたジェイムズ・ボズウェル (James Boswell, 1740–1795) は，グラスゴウ大学に学び，アダム・スミスの法学講義を聴いたが，特段感銘は受けなかった。彼はミラーとは違って，スミスの弟子を自認せず，またスコットランドにも満足できずに，広い活動の場を求めて遍歴する。前世紀のジョン・オーブリにも似たフィールド・ワーカーでカサノヴァ的なエピキュリアンのボズウェルは，多くの旅をし，様々な経験を重ね，多彩な人士に会い，膨大な旅の記録を残して，華々しい人生を送った。ボズウェルのサミュエル・ジョンスンとの出会いは1763年のことである。ボズウェルはジョンスンにいたく心酔し，以後ジョンスンの弟子として私淑し，旅に付き添い，『ジョンスン伝』(1791) を書いた。

ボズウェルはイタリアへの旅で，筆禍事件で議席を剥奪され弾劾されて当地に避難していたウィルクスから，コルシカ独立運動の愛国者パオリ将軍 (Paoli, Pasquale di, 1726–1807) に紹介された。コルシカに関心を深めたボズウェルは『コルシカ論』(1768) を刊行する。パオリは1755年に，ジェノヴァの専制支配に対して貴族領主や小農民を組織して独立運動を展開し，一度は島の大半を占領した。しかし，島がフランス領となってから抵抗は弾圧され，やがて1769年にはイングランドに亡命し，ボズウェルの導きでジョンスンの庇護を受けたのである。

ジャン・ジャック・ルソーには「コルシカ憲法草案」がある[15] が，ボズウェルとルソーを繋ぐものがあったとすれば，それは愛国的共和主義への関心であった。専制政治と自由の戦い，独裁者と愛国者の戦いは，啓蒙の時代を迎えてからもいまだに続いていた。いな，むしろ市民が祖国の現状に目を向け，自国への関心をますます強く抱き始めた啓蒙の時代にこそ，専制との戦いはますます重要な課題となってきた

15) 木崎喜代治訳『コルシカ憲法草案』，未来社，社会科学ゼミナール，1979年。以下の記述は本書の解説を参照した。

と言いうるであろう。大国は啓蒙の時代にあって自由と富裕を享受し始めていたとしても，その周辺国はしばしば植民地や属国となって大国に支配されていた。多くの小国の自由と独立を求めた戦いは18世紀を彩っているのである。ポーランドも，オランダも，コルシカも，そうした境遇に置かれていた。

1768年頃にジェノヴァからフランスがコルシカの支配権を獲得した。こうしてフランス領となったが，イタリア半島に近く，長くジェノヴァの支配下に置かれていたとはいえ，小国コルシカは独自の伝統をもった島国である。18世紀になるとジェノヴァの圧制に対する反抗が本格的に始まった。40年にわたる抵抗戦争のさなか，1735年にジョバンニ・パオリはコルシカの独立を宣言したが，ジェノヴァ，フランス，スペインなどの干渉がやむことはなかった。ジョバンニの子供であったパスカル・パオリが独立運動を開始するのは1755年のことである。愛国者パオリは苦難の独立運動に投じたものの，終に1769年に敗北した。

しかし，コルシカがフランスに同化されてしまうのは相当の無理があった。やがて，コルシカからナポレオンが生まれるのは，もちろん偶然なのだが，偶然を越えるものがあったかのように思われてしまう。フランスで，ボズウェルはヴォルテールと共にルソーに会っているが，そのときボズウェルは，スコットランドの愛国者フレッチャーの伝記を書いてはどうかとルソーに勧めた，というエピソードが残されている。

ボズウェルはまさに旅に生きた人物である。そのボズウェルもアメリカへの旅はしていない。アメリカは，彼の関心の外にあった模様である。楽しい旅の時代は平和な時代である。戦乱のさなかには旅どころではない。従軍兵士は行軍という旅をするとも言えようが，それは旅としては本来の姿ではない。旅とは何か。啓蒙の時代になって，今や旅は人生そのものになりつつあった。もちろん，知的エリートの旅は啓蒙の18世紀に始まったものではない。それまでの知識人の旅はどうだっただろうか。

2　学問共同体

ホッブズのように大陸の宗教戦争，いわゆる30年戦争（1618–48）のさなかにアルプスを越えてガリレオに会うためにパドヴァを目指した例もある。少なくとも17世紀までは学者の学問共同体がヨーロッパには存在していた。ラテン語の世界である。ラテン語を話し，ラテン語で著述した思想家たちは，真理を求め，また学問的研鑽の場と知的交流を求めて移動した。遍歴職人さながら学者も旅をしたのである。商人たちが様々な財貨を運んで旅をしたことは言うまでもない。旅が商人たちのネットワークを構築した。また，そもそも中世においては，騎士や職人とおなじく，聖職者も学者も遍歴をしたのであった。パリやボローニャへと彼らは旅をした。18世紀にも学問共同体の遺産はあったが，それぞれの国語に依拠する文化が次第に優勢となり，国民文化の時代となっていく。排他的になりがちの国民文化に，啓蒙の普遍的価値をどう受容するかというのは，重要な課題であった。

ルネサンスの時代，人文主義者（ヒューマニスト）はイタリアを目指した。イングランドからもたくさんのヒューマニストがイタリアで学んでいる。自然哲学者はパドヴァを目指し，法学者はボローニャに滞在した。マキァヴェッリを生んだメディチ家のフィレンツェもまた旅人をひきつけてやまなかった。その影響は17世紀まで続いており，ハリントンはヴェネツィアの共和政に恋をした。ホッブズもまた30年戦争の最中に戦禍を避けてパドヴァを目指して旅した。そして17世紀になるとイタリアのほかに，学者はオランダを目指して旅をした。また各国，各地の宮廷は学者を招聘したから，思想家の移動は頻繁となった。デカルトやプーフェ

ンドルフは方々へ旅をしている。

3 アジールと大学

17世紀に共和国連邦として栄えたオランダでは，商業的富を基盤にして学問と文化が発展した。ライデン，ユトレヒト，フロニンヘンなどの自由を享受したオランダの大学は，異端審問で思想家を迫害したイタリアやスペインの没落を尻目に，世界の学術の頂点に立ち始めていた。グロティウスも，ピエール・ベイルもルクレールも，スピノザもいた。先述のようにウィリアム・ペティとホッブズはライデン大学でベッサリウスの解剖学を学んだ。王政復古で弾圧されたイングランドとスコットランドの政治家や思想家もオランダに亡命の旅をした。プロテスタントのオランダは学問が栄えた大学の国であるとともに，異端を受け入れる寛容の国であり，アジールであった。初代シャーフツベリ伯爵，ロック，バーネット，カーステアズなどがそうである。彼らはオレンジ公ウィリアムとその軍とともに，イングランドに帰還の旅をした。

名誉革命後はイングランドもアジールとなり，ナントの勅令の廃止によって，フランスのユグノーは，オランダとともにイングランドへ亡命の旅をした。ヌジェント（Thomas Nugent）のようなユグノーの子孫は，フランス啓蒙の著作を英訳して貢献した。そのイングランドでもスコットランドでも，18世紀の末になると，フランス革命の影響を遮断するために，政府が急進派への弾圧を厳しく行なったので，職を得られない急進派知識人は，独立革命を実現した自由の国アメリカへと亡命していく。アメリカはこうして急進派のアジールとなった。さらにフランス革命は，デュポン・ド・ヌムールのようなフランスからのアメリカへの亡命者を生み出す。政治的亡命者に対する寛大な受け入れは，アメリカの伝統となる。20世紀にナチスに弾圧されたユダヤ人は，アメリカに救われるであろう。

V 学問共和国から世界共和国へ

18世紀になると，思想家はますます自国語で著作するようになる。学問共同体は依然として存続していたが，共通言語のラテン語は通用性を次第に失っていく。ヒュームやスミスはフランスに長く逗留するが，ラテン語ではなく，フランス語に英語を交えて話したのであろう。カトリック圏の大陸では宮廷文化，貴族のサロン文化の華が開き，フランス語がラテン語に代わって上流社会，エリート文化圏の通用語となっていく。フリードリッヒの宮廷やロシアのエカテリーナの宮廷もまたフランス語の世界であった。エリート文化圏がフランス語の世界であるということは，ヴェルサイユ宮殿に象徴されるフランスの宮廷文化とフィロゾーフの影響力がそれだけ大きかったことを物語るであろう。イタリアも思想家をひきつける魅力を持ち続けた。ゲーテは1786年にアルプスを越えてイタリアへ旅し，『イタリア紀行』を残した。ゲーテを惹き付けたのは，もはやアカデミーや大学の魅力ではなく，古代ローマの遺跡とルネサンスの美術・建築の輝かしい遺産であった。ロマン主義が生まれようとしていた。それはヘルダーやオシアンを通じて誘われたゲルマン的，ゴシック的世界への関心とシュトルム・ウント・ドランクの暗い情熱から，明るい光に満ちた古典主義への転換をもたらした。それはゲーテにおける啓蒙であった。

こうした学問共和国の伝統がヨーロッパにおけるコスモポリタニズム（世界市民主義）を支えた。それはある意味で，かつてのキリスト教共同体の再建であったが，紐帯はもはやキリスト教そのものではなく，知的交流であり，知識人，自由人，市民としての連携であった。国と宗教や出自が違っていても，知＝啓蒙の精神で，彼らは強く繋がっていた。それはエリートの連

携にすぎなかったかもしれないし，国民国家の成立と排外的なナショナリズムの興隆に対して，必ずしも有効な批判ができなかったかもしれない。実際に啓蒙知識人は公共的役割を演じたし，国家形成にコミットし，ナショナリズムに取り込まれたこともある。保護に忠誠が伴うように，国家から俸給を与えられるようになれば，国家への忠誠義務が生じるのは当然である。啓蒙知識人の忠誠心はパトロンとしての王侯貴族から国家そのものへと変容しつつあった。フランス革命では知識人は愛国者として国家，祖国，「自由の樹」に忠誠を誓うであろう。独立したアメリカ人も共和国に忠誠を誓うようになる。ブリテンはどうか。ここでは多くの知識人は穏健な国教会に包容された牧師であるか，大学教授や法曹，あるいはジャーナリストとなって，自由な国制のもと文筆業に精力的に携わったが，一部の非国教徒知識人は，言論出版の自由を武器に，少数派の解放と権利の実現のために，改革を唱えていた。イングランドにはロバート・ウォルポール，チェスタフィールド，ビュートのような党派的なパトロンもいれば，シェルバーンのような包容力のあるパトロンもいた。ビュート卿の伯父であるアーガイル侯爵は，スコットランドの若者に教会，大学，法曹の世界にわたって膨大な数の恩顧を与えた。

啓蒙の時代には国際的な交流がますます活発となった。アイルランド系の知識人のなかには，バークリ，スウィフト，バーク，ゴールドスミスのように，イングランドで活躍するものもあり，アメリカではペンシルヴァニア，マサチューセッツ，ヴァージニアが啓蒙の時代を迎え，ヨーロッパからの来訪者を迎えた。アメリカの医学生はエディンバラに，法学生はロンドンに留学した。ウィザスプーンやウィルスンなどのスコットランドの知識人はアメリカに渡った。知識人はコスモポリタンであることが可能であった。英語圏の知識人の連携は，とくに長老派の場合，強いものがあった。フランスとイタリアの知識人も交流するし，大ブリテンとフランスの知識人も交流した。

1　思想家の蔵書

こうした旅の目的の一つは現地の知識人との交流であったが，書籍の収集も目的の一部であった。ホッブズは庇護者のデヴォンシャー公爵のために，パリでガリレオ・ガリレイの『天文対話』を探している。初期啓蒙の時代においては，言論出版の自由は多くの国で制約されていたが，出版活動はますます盛んになっていた。古典の再刊，国語への翻訳のほかに，次々と新しい書物が刊行されるようになっていた。定期的に刊行される「書評誌」や思想雑誌も前世紀から多数出るようになっていた。

17，18世紀には個人で数千冊の蔵書を持つ思想家が出てくる。アンドルー・フレッチャー[16]，アダム・スミス[17]，テュルゴ[18]などである。ペンシルヴァニアのローガンの蔵書も重要であったし，ジェファスンの蔵書も有名である。ヒュームも立派な蔵書をもっていたらしいが，それは散逸した[19]。貴族の蔵書はさらに大規模であった。スミスなどに恩顧を与えた第3代アーガイル公爵は，自らも学者であったが1万冊を超える蔵書を所蔵していた。弁護士図書館には3万冊があって，ヒュームが『イングランド史』（1746–61）の執筆に利用したことはよく知られている。当時，エディンバラ

16）*BIBLIOTHECA FLETCHERIANA: or, the extraordinary library of Andrew Fletcher of Saltoun*, reconstructed and systematically arranged by P. J. M. Willems, Privately published, Wassenaar, 1999.

17）Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library, A Catalogue*, Oxford: Clarendon Press, 2000.

18）津田内匠『チュルゴの蔵書目録』，一橋大学経済研究所資料調査室，1974–75年。

19）David Fate Norton & Mary J. Norton, *The David Hume Library*, Edinburgh Bibliographical Society in Association with The National Library of Scotland, 1996.

大学には1万3千冊が所蔵されていたが，貴族の蔵書がそれに匹敵することは重要な事実である。ナポリの貴族思想家，ヴァレッタの蔵書も有名で，ヴィーコなどの世代を育てる役目を果たし，ナポリ啓蒙の温床の一部となったらしい。そうした貴族や思想家の膨大な蔵書は，公共図書館が不十分だった時代には，インフラストラクチャーの役目を果たした。ジェイムズ1世の蔵書はブリティッシュ・ライブラリーとなり，生涯，書物の蒐集に努めたジェファスンの蔵書はアメリカ国会図書館となった。

19世紀から20世紀にかけて，知識人はどのような仕事をし，どのような旅をし，学問共同体はどのようになったのであろうか。多くのことが知られているが，それは依然として興味深い問いである。けれどもその問いは，本稿の外にある。

Ⅵ　終わりに

啓蒙の拠点はスコットランドにもあったが，フランスこそ最大の啓蒙の地であった。そしてまさに啓蒙の所産であるとともに，啓蒙を一掃したフランス革命は，やがてナポレオンのボナパルティズムに継承され，フランスは，通俗的な理解によれば，ナショナリズムの国となる。しかし，ナショナリズムを民族主義と理解するとすれば，フランス共和国はナショナリズムではなく，自由，平等，博愛を理念とする共和主義を原理とする国家であった。この国家は社会主義の挑戦を受けて，変転を遂げていく。

19世紀から20世紀にかけての思想潮流の展開は本稿では扱えないが，ナショナリズムと民族主義，そして自由主義と共和主義は，ヨーロッパにおいて，その後，複雑で混乱した歴史をたどることになる。そこに社会主義と帝国主義も加わったから，混乱は増した。市民社会の概念も複雑になったし，国家とは何かについての理解，国家観自体も混迷していく。この混迷は，ある意味では20世紀まで続いた。

19世紀にも，20世紀にも啓蒙の要素は当然，継承された。19世紀は産業革命によって機械の時代となり，地球の領土分割に拍車をかける帝国主義を生みだした。社会主義は帝国主義を乗り越えることができなかった。大工業時代の巨大な生産力は20世紀の戦争の惨禍を拡大した。20世紀の前半から中葉にかけては戦争と革命の極端な時代であった。帝国主義は続いていた。第2次大戦の講和が世界平和を目指すきっかけとなり，国連のもとに平和を求めることになったが，長く冷戦と熱核戦争の恐怖が世界を支配した。

20世紀の終わりになって冷戦が終焉して，ようやく国際協調の時代へと世界は向かい始めた。しかし，いまだ，世界は平和な繁栄の時代を確立したとは言いがたい。核抑止によって暴力は封鎖されているが，核戦争の脅威が消滅したわけではない。恐怖や闇の支配からの啓蒙は，いまだに完成していない。現在の啓蒙は世界共和国の構築を目指さなければならない。

啓蒙の始まりを18世紀の初頭に設定しても，いまだ300年にしかならない。日本の啓蒙はせいぜい200年の歴史にすぎない。啓蒙の課題はいまだ完成していない——啓蒙の未完のプロジェクト——が，18世紀のヨーロッパで啓蒙思想が生まれ，人間精神に希望が見いだされたことは18世紀の栄光であろう。その遺産は今もなお我々との対話を待っている。